

令和7年度

# 運営に関する計画 【最終評価】

大阪市立瓜破西中学校

令和8年2月

大阪市立瓜破西中学校 令和7年度 運営に関する計画・自己評価(総括シート)

※はじめに

令和5年度に、令和4年度から7年度までの中期目標を変更し、概ね令和5年度から7年度までの目標として設定しています。

1. 学校運営の中期目標

**現状と課題**

学校全体としては落ち着いた状態で日々の教育活動を展開できている。教職員も授業研究に余念がなく、行事や特別活動の取り組みに対しても熱心である。また、生徒対応だけでなく、家庭訪問等の保護者対応にも日々努めている。ただし、次の点においては、本校の課題であると考えている。

- ア) 一部に、日常的な校則違反をする生徒や生活リズムが崩れている生徒がみられる。保護者の協力も得にくく、指導を繰り返すものの、あまり効果がなく、改善の見通しが立てられない。
- イ) 不登校生徒が多く、対応に苦慮している。令和6年度の年間 30 日以上の欠席者は、1 年18名, 2 年20名, 3 年20名の合計58名であり、全校生徒の 16.6%に達している。
- ウ) 各種テストにおける得点力に多くの課題がみられる。令和6年度の全国学力・学習状況調査(3年生のみ対象)、大阪府チャレンジテスト(チャレンジテスト plus も含む)の結果は以下の通りである。

◆全国学力・学習状況調査(3年生のみ対象)

	全国	市	本校
国語	58.1	56	53
数学	52.5	51	49

◆チャレンジテスト(1年の理社はチャレンジテストplus)

	1 年		2 年		3 年	
	府(市)	本校	府	本校	府	本校
国語	58.5	57.0	65.5	59.1	65.2	61.9
社会	53.7	52.5	49.5	48.2	50.4	42.4
数学	49.8	45.2	50.7	46.6	49.1	50.4
理科	55.6	50.4	47.2	50.0	52.4	47.0
英語	61.5	55.7	54.0	45.4	53.6	50.8

エ) 校内体制として、生徒が主体的に取り組める活動が少ないことが以前からの課題であったが、この数年の教員の努力で、徐々にそういった活動が増えている。“指示を受けてから動く”のではなく、“自ら考えて動く・判断する”といった生徒を増やしていく必要がある。

オ) PTAとの連携は、以前と比べると活発とまでは言い難い。少なからずコロナの影響もあって、どちらかといえば縮小される傾向にあると思われる。

## 中期目標

### 【安全・安心な教育の推進】

◎不登校生徒の減少をめざし、令和7年度末には6%未満までとする。

### 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

◎学力向上をめざし、令和7年度には【全国学力学習状況調査】における各教科の得点を全国と、【チャレンジテスト】では各教科の得点を大阪府と、【チャレンジテスト plus】では各教科の得点を大阪市と、同じレベルにする。

### 【学びを支える教育環境の充実】

◎各教科の授業において、ICT機器を活用した授業を令和7年度には年間80%以上にする。

◎「教員の時間外勤務時間の状況について」中、「3 貴校教員の時間外勤務時間上限基準の達成率」の「基準1」を、令和7年度1月度には45%以上にする。

## 2. 中期目標の達成に向けた年度目標

### 【安全・安心な教育の推進】

◎年度末の校内調査における「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して、肯定的に回答する生徒の割合を75%以上にする。

◎年度末の校内調査における「自分には、よいところがあると思いますか」に対して、肯定的に回答する生徒の割合を80%以上にする。

### 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

◎中学生チャレンジテストにおける国語の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる。

◎中学生チャレンジテストにおける数学の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる。

### 【学びを支える教育環境の充実】

◎授業日において、生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。〔ただし、事務局が定める学校行事等で端末の活用が適さない日を除く〕

◎年次休暇を10日以上取得する教職員の割合を60%以上にする。

### 3. 本年度の自己評価結果の総括

#### 【安全・安心な教育の推進】

◎不登校生徒の多い点が本校の大きな課題のひとつである。不登校生徒の割合を令和8年度末には6%未満とすることを目標にして取り組んできたが、令和5年度11%が、令和6年度には16.6%に増えてしまった。今年度より、不登校生徒の居場所のひとつとして「サポートルーム」を設置したところ、これまでほとんど登校できなかった生徒がサポートルームに登校するようになり、その後、少しだけだが教室に入るようになるなど、良い方向に変化している例がいくつも見られるようになってきている。その結果、令和7年度(1月末時点)の不登校生徒の割合は12.4%となり、少しずつ成果となって表れている。中期目標は達成できていないが、今後も家庭や関係諸機関の協力を得ながら、継続して取り組みを進めていきたい。

◎学校評価アンケート(生徒)「学校に行くのが楽しい」の項目で、肯定的回答をした生徒の割合は88%(目標75%以上)となり、数値目標は達成することができた。また、「自分にはよいところがあると思う」の項目は81%(目標80%以上)となり、こちらも数値目標は達成することができた。アンケートを提出していない生徒もいるので、この結果だけで安心することはできないが、学校の取組が一定の成果を出していると考えられる。

◎学校評価アンケート(生徒)の結果を見ると、「先生は自分たちの思いを受け止めてくれる」(89%)、「自分はどんなことにも最後まであきらめずに頑張っている」(79%)、「自分は学校の決まりやルールを守っている」(94%)、「自分には悩み事などを相談できる友だちがいる」(91%)など、自己肯定感にかかわるような項目で高い割合の生徒が肯定的回答をしており、しかも昨年度より数ポイントずつ増えている。これらは、生徒たちが安心して学校生活を送っていることを裏づける一定のデータであると考えられる。

#### 【未来を切り拓く学力・体力の向上】

◎チャレンジテスト(1・2年)の結果はまだわからないが、全校の傾向としては全国や大阪府の平均を下回ることが多く、学力面の課題は多いと考えている。ただ、チャレンジテストの結果がすでにわかっている3年生についていえば、府平均にかなり迫る結果を残している。その点で、中期目標達成の方向に近づいている。今後も粘り強く取り組みを進めたい。

◎学校評価アンケート(生徒)の結果を見ると、「学校の授業はわかりやすい」(91%)、「先生は教え方をいろいろ工夫してくれている」(94%)、「国数英の少人数授業・グループ別授業・TT授業はわかりやすい」(78~89%)など、授業や学習に対しては昨年度と同様に前向きである。ただ、テストで結果を出すためには、授業だけでなく、家庭学習や自学自習が不可欠である。生徒の前向きな気持ちを保ちながら、家庭学習・自学自習の習慣づけをして、テストでも結果を残せるように導きたい。

◎中学2年生を対象に実施される「全国体力・運動能力調査」では、男女差はあるものの、全8種目中6種目で全国平均または大阪市平均を上回る結果を残している。

#### 【学びを支える教育環境の充実】

◎「生徒の8割以上が端末を活用した日数を授業日の50%以上にする」を目標に掲げ続けているが、昨年度で活用率が8割以上に達したのは1日だけで、授業日の50%以上は程遠い現状であった。今年度も6~7割前後を行き来する日が続いていたが、11月中旬の端末入替をきっかけに、8割以上に達する日が増えており、12月末時点で13日に達している。教員の中でも「授業で端末を使ってみよう」という意識が高まっており、「授業日の50%以上」という目標は依然として程遠い目標ではあるが、確実にその方向には進んでいる。

◎年次休暇を10日以上取得する教職員の割合は、1月末時点で60%(35人中21人)であり、目標の60%を達成した。長期休業中の学校閉庁日や、週1日の“ゆとりの日”の設定が休暇を取得しやすい状況を作っていると思われる。時間外勤務時間も昨年度から減っており、「基準1」は50%に達しており、2つめの中期目標は達成できている。

(様式2)

## 大阪市立瓜破西中学校 令和7年度運営に関する計画・自己評価(目標別シート)

評価基準	A: 目標を上回って達成した	B: 目標どおりに達成した
	C: 取り組んだが目標を達成できなかった	D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<b>【安全・安心な教育の推進】</b> ◎年度末の校内調査における「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して、肯定的に回答する生徒の割合を75%以上にする。 ◎年度末の校内調査における「自分には、よいところがあると思いますか」に対して、肯定的に回答する生徒の割合を80%以上にする。	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<b>取組内容①【1安全・安心な教育環境の実現】</b> ◎カウンセリングマインドに基づいた生徒対応を実践する。	B
<b>取組内容②【1安全・安心な教育環境の実現】</b> ◎生徒自らが発案計画実践できる取り組みを計画する。	B
<b>取組内容③【1安全・安心な教育環境の実現】</b> ◎「今週のできごと」を継続実施する。	B
<b>《①②③の共通指標》</b> 1か月の欠席者及び保健室来室者数(心因性)を昨年度の同月より減少させる。	C

年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析
◎常日頃から担任だけでなく多くの教員で生徒の様子を見守り、生徒の声を丁寧に聞き取って対応することを心がけているが、その姿勢を崩すことなく続けることができた。 ◎毎週末の振り返りシート「今週のできごと」、毎日の「心の天気」、1人1台端末の「相談機能」など、生徒がSOSを発信するさまざまな機会を大切にして、トラブルの早期発見に努めているが、そういう機会があることも生徒の間に定着しつつあるようである。 ◎保健室の(心因性による)来室者数は、月による差はあるものの、年間を通して見ると、昨年度より増えている。この数字だけを見れば状態が悪化しているといえるかもしれないが、生徒が教員に気持ちを訴えに来ている(教員に話を聞いてもらいたがっている)と解釈することもできるので、生徒の声に耳を傾ける姿勢は継続させたうえで、保健室に来室した生徒の様子を見極めていく必要がある。 ◎欠席者数は年間を通して大幅に減少した。昨年度と母集団が変わっているので単純には比較できないが、生徒の声を丁寧に聞き取る姿勢や、今年度より開始したサポートルームの取組が一定の成果をあげているとも考えられる。継続して取り組んでいきたい。 ◎生徒が主体となる活動は、生徒会による活動が中心となるが、朝の挨拶活動(アイカツ)などは生徒会役員以外にも、たくさんの生徒が参加して活動を大いに盛り上げることができた。各学年でも、生徒主体で授業態度改善に関する取組をおこなっている。 ◎3年生の修学旅行では、修学旅行実行委員会の生徒たちが主体となって、修学旅行のルールを決めたり、学年レクリエーションを企画運営したりするなど、修学旅行の成功に

向けて積極的に活動した。自分たちで行事を創るモデルともなると考えられる。

◎昨年度は、主体的に活動する生徒が限定的である点が課題であったが、今年度は多くの生徒に呼びかけることで参加者が増えている。引き続き、全校生徒を巻き込んだ活動が展開できるよう努めていきたい。

#### 次年度への改善点

◎学校評価アンケート(生徒)の結果を見ると、「学校へ行くのが楽しい」(88%)、「先生は自分たちの思いを受け止めてくれる」(89%)、「先生は教え方を工夫してくれている」(94%)、「自分は学校の決まりやルールを守っている」(94%)、「自分には悩み事を相談できる友だちがいる」(91%)、「友だちや先生にすすんであいさつをしている」(85%)など、同級生や教員と一定の信頼関係を築きながら学校生活を前向きに送っている生徒の様子がうかがえる(昨年度よりも数値は上がっている)。「安全・安心な教育の推進」という意味では一定の評価をしてもよいと考えている。

◎昨年度のこの欄で、「カウンセリングマインドに基づいた生徒対応を実践する(取組内容①)ことで、生徒は安心して教員に自分を出すようになり、そのことが本校を「安全・安心な学校」に近づける」と述べた。この1年間を振り返ると、まだまだ課題はあるが、本校は「安全・安心な学校」に近づいているといってもよいと考えている。上のアンケート結果は、そのことを支持するデータとなるものである。継続して取り組みを進めたい。

◎不登校対策は本校の大きな課題のひとつであるが、今年度はサポートルームの設置によって状況が変わってきている。教員が、生徒や保護者からの相談に対して、サポートルームという選択肢を提示できるようになったことにも大きな意味がある。「不登校の生徒を学校に戻す」、「不登校になりそうな生徒を学校に引きとどめる」といった点で、今後はますます注目される取組となるだろう。現在のサポートルームは自学自習のスタイルであるが、今後は利用者増加を想定して、「リモート授業」、「授業動画視聴」、「スタディサプリ」など、サポートルーム内の活動にも選択肢を増やしていく必要があるとされている。

◎毎日の「心の天気」の入力はかなり定着しており、クラスによる差はあるものの、7～8割の生徒が入力している。一方、90%以上の生徒が入力するクラスでも、毎日入力しない生徒がいるのも事実である。「生徒の声を聴く」という意味では、入力率が90%である点のみで満足することはできない。次年度以降、入力が定着した次の段階として「入力しない生徒へのアプローチ」にも取り組んで、生徒の安全・安心につなげていきたい。

◎前述したように保健室の来室者数(心因性)だけを見れば「状態が悪くなった」ともいえるが、心因性のトラブルは特に生徒の声を傾聴する必要がある。保健室がそのための場所として機能しているなら、来室者が増えたこともあながち悲観するものではない。ただ、心身が本当に良い状態であれば、やはり保健室の来室者は減ってくるはずなので、そのことも肝に銘じながら、生徒対応に取り組んでいきたい。また、昨年度も述べた「授業で活躍できる場をつくって教室につなぎ止める」という発想をもって授業を展開することも教員は忘れてはならない。次年度も引き続いて本校の課題となる。

◎生徒が主体となって進められる取組として、生徒会の“アイカツ”や3年生の修学旅行実行委員会以外に、生徒議会や学年委員会が中心となって「授業態度改善キャンペーン」といった取組がおこなわれた。授業態度や学校生活に課題のある生徒に対して、正しく問題意識をもち、複数で協力しながらその問題にアプローチするというプロセスがきちんと取られている。問題行動を繰り返す生徒は一定数いるが、それを(声は出せないけど)許していない生徒が確かに育っている。まだまだ声を出すことのできない生徒も多いため、教員は、そういった“声にならない気持ち”を引き出し、取組という形にして表現させる存在となるべきである。その先にこそ「安全・安心な学校」があるといえる。次年度以降も、課題のある生徒への指導はもちろん、それと同時に、問題行動をしない生徒・声を出さない生徒たちの気持ちを引き出して、正しく指導を続けていきたい。

(様式2)

大阪市立瓜破西中学校 令和7年度運営に関する計画・自己評価(目標別シート)

評価基準 A: 目標を上回って達成した B: 目標どおりに達成した  
C: 取り組んだが目標を達成できなかった D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<b>【未来を切り拓く学力・体力の向上】</b> ◎中学生チャレンジテストにおける国語の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる。 ◎中学生チャレンジテストにおける数学の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる。	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<b>取組内容①【4 誰一人取り残さない学力の向上】</b> ◎国語・数学・英語における習熟度別分割授業を充実させ、全体的な得点力向上を図る。	C
<b>取組内容②【4 誰一人取り残さない学力の向上】</b> ◎全教科を通じて授業の振り返りを授業ごと(单元ごともしくは1教材ごと)に150字程度の作文を書かせることによって、書く力を伸ばす。	B
<b>取組内容③【4 誰一人取り残さない学力の向上】</b> ◎読解力・表現力の向上をめざした授業実践(音読, ペア&グループ学習, プレゼン, 探求型学習)をおこなう。	B
<b>指標:</b> RST(リーディングスキルテスト)を第1学年の初期と第2学年の後期に実施し、その成績を向上させる。	
<b>《①②③の共通指標》</b> ◎中学生チャレンジテストにおける国語の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる。 ◎中学生チャレンジテストにおける数学の学力に課題の見られる生徒の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より1ポイント減少させる。	B

## 年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析

- ◎国語・数学・英語の分割授業は、教科によって取り組み方に差はあるものの、単純分割授業・習熟度別分割授業ともに概ね展開できた。RSTは2年生において2月下旬におこなう予定である。結果を踏まえて、指導方法の改善に役立てていく。
- ◎学力向上に向けた取組は、改善や修正を加えながらも、すべて昨年度と同じようになっている。特に、音読やグループ学習、プレゼンなどは、生徒同士が互いに学び合うことができる、1人だけが取り残されないといった点で、学習効果が期待される。すべての教科で毎時間取り組むわけではないが、教材や単元によって、柔軟な授業展開をおこない、生徒たちにも概ね好評である。それらの取組は年間を通して継続することができた。
- ◎現時点で結果がわかっているテスト(全国学力・学習状況調査、大阪府チャレンジテスト[3年] ※いずれも第3学年が受験したもの)についていえば、全国平均や大阪府平均との差が縮まってきている。昨年度の校内調査(学校評価アンケート)から、授業に対して前向きな姿勢や、生徒と教員の良好な関係などがうかがえたが、そういったことが実を結びつつあると考えることができる。
- ◎「誰一人取り残さない」という意味では、不登校対策も重要になる。今年度、学校を休みがちな生徒や教室に入りにくい生徒の居場所として、「サポートルーム」を開設した。自学自習が原則であるが、開設以来、毎日3～4名の生徒が利用している。これまでなら「欠席」となっていた生徒が、登校し、各自で課題プリントに取り組むなどして過ごし、給食を食べて帰る。担任と面談することもあり、間違いなく学校生活の中に居場所を見つけている状態であると考えている。

## 次年度への改善点

- ◎学力向上に向けた取組(音読やグループ学習、プレゼンなど)は、多くの教科で定着しつつある。分割授業も、教科によって多少の差はあるものの、単純分割・習熟度別分割ともに概ね展開することができた。ただ、これらの取組は「取り組むこと」自体を目標にするのではなく、あくまでも目指すべきは学力向上なので、その手段と目的をはき違えてはいけない。次年度以降も引き続き、教員の意識向上とスキルアップが求められる。
- ◎令和7年度のチャレンジテストは、まだ3年生しか結果が出ていないので、同一母集団でその結果を比較するとすると、令和6年度の2年生と令和7年度の3年生の比較となる。国語と数学において学年全体を比較すると、正答率は昨年度も今年度も府平均を下回っている。ただ、府平均との差は縮まっており、その比を見てみると、国語は0.90→0.98に、数学は0.92→0.97にと、それぞれ府平均に迫っている。なお、理科は1.06→1.07、社会は0.97→1.07と、正答率はそれぞれ府平均を上回っている。
- ◎令和6年度の2年生と令和7年度の3年生の大阪府チャレンジテストの結果について、学力に課題の見られる層(正答率30%以下)の割合を見てみると、国語が19.5%→8.2%、数学が29.6%→13.7%と、学力に課題の見られる層の割合は大きく減っている。1月末時点で令和7年度の1・2年生の結果が出ていないので、これ以上の比較分析はできないが、今後結果が出れば令和6年度の1年生と令和7年度の2年生(同一母集団)でも同じように比較できるので、来年度の「運営に関する計画」に載せていきたい。
- ◎今年度設置したサポートルームは毎日一定数の生徒が利用している。学校に来られず、ほとんどの時間を自宅で過ごしていた生徒が、制服に着替えて登校し、自学自習とはいえ学習に取り組む、給食を食べ、担任と面談するということが、彼らの自己肯定感を高め、少しずつ前を向いて人生を歩めるようになってきている。中には、「教室に入ってみる」といい始める生徒も現れるなど、たいへん喜ばしい結果につながっている例もある。次年度に向けて、内装を整える・関わるスタッフを増やすなど、環境の整備を進める必要がある。今後も、【誰一人取り残さない】に向けて取組を進めていく。

(様式2)

大阪市立瓜破西中学校 令和7年度運営に関する計画・自己評価(目標別シート)

評価基準 A: 目標を上回って達成した B: 目標どおりに達成した  
C: 取り組んだが目標を達成できなかった D: ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
<b>【学びを支える教育環境の充実】</b> ◎授業日において、生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。〔ただし、事務局が定める学校行事等で端末の活用が適さない日を除く〕 ◎年次休暇を10日以上取得する教職員の割合を60%以上にする。	C

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
<b>取組内容①【6 教育DX(デジタルトランスフォーメーション)の推進】</b> ◎ICT活用技術の研修会を年間を通じて3回おこなう。 <b>指標:</b> 授業日において、生徒の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。〔ただし、事務局が定める学校行事等で端末の活用が適さない日を除く〕	C
<b>取組内容②【7 人材の確保・育成としなやかな組織づくり】</b> ◎退勤時刻17:30までの教職員用「ゆとりの日」を月に4回確保する。 <b>指標:</b> 年次休暇を10日以上取得する教職員の割合を60%以上にする。	B

年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析
◎教員を対象としたICT活用研修は、学期に1回のペースで実施している。これまで2回実施しており、3学期末までに3回目を実施する予定である(日程は未定)。 ◎学習者用端末についていえば、「生徒の8割以上が学習者用端末を活用する」ということ自体が現状では最も目標から遠くかけ離れている。平均して毎日7割前後の生徒が端末を活用しているが、8割以上となると11月中旬までは「年間授業日の50%」どころか、1日もなかった。ただ、11月中旬の端末更新以降は徐々に8割以上の活用が見られる日が増えている。生徒が「端末が新品になったから触りたい」と思うのをきっかけに、端末を活用できるような授業を展開していきたい。 ◎教職員用「ゆとりの日」は、昨年度と同じく、年間を通して週に1度のペースで設定してきた。今年度より、保護者に配付する行事予定表にも「ゆとりの日」を記入するようにして、職員室の電話対応を17時に終えることなどについて、広く理解を求めている。そのことに反対するご意見等も聞かれず、一定の理解を得ていると考えている。 ◎「ゆとりの日」の設定は予定通りおこなっており、教職員の時間外勤務も昨年度から引き続き減少傾向にある。「年次休暇を10日以上取得する教職員の割合を60%以上にする」という点は1月末時点でちょうど60%(35人中21人)に達した。年次休暇以外に、夏

季休暇や休日出勤の振替休日、育児時間(子の看護休暇)や短期介護休暇等を取得する教職員も多く、欠員が多かった昨年度の「休みたくても休めない」という、追いつめられるような状況は脱して、現在は比較的休暇を取りやすい状況にあると思われる。

#### 次年度への改善点

- ◎教員を対象としたICT活用研修は3学期に3回目をおこなう予定である(日程は未定)。昨年度と同様、回数の指標は達成できる方向である。ただ、「授業で新しく学習者用端末を使ってみよう」と考え始める教員は微増程度のものである。新しいスタイルの授業を展開すると、相応の準備時間が必要となるが、まだそこまでの余裕は確保できないという教員が一定数いるようである。授業でも学習者用端末が当たり前の道具として使用される時代であるため、引き続き、教職員も授業の中で当たり前に学習者用端末を活用できるように研鑽を積む必要がある。校内研修をそのきっかけとしたい。
- ◎前述したが、「生徒の80%以上が学習者用端末を活用する日を、年間授業日の50%以上にする」という指標がもっとも達成から遠くかけ離れている。端末活用のきっかけとして、昨年度から「心の天気」の入力を進めてきたが、こちらは(クラス差はあるものの)平均70%前後の生徒が入力するようになっている。定着しつつあるといえるが、活用率を80%以上にするには、授業での活用が不可欠である。その点、端末更新がおこなわれた11月中旬以降、活用率80%以上の日が増えてきている。12月だけを見れば授業日数17日のうち、12日(授業日の71%)で80%以上が活用している。12月は「端末が新しく便利になったので触りたい」という気持ちも大きかったと思われるが、そのことをきっかけとして、授業でも継続して端末を活用するように進めたい。そのためには、教職員側も意識を高めることが求められる。次年度以降も引き続き、各学年・教科で工夫して取り組み方を模索していきたい。なお、「心の天気」を「生徒の声を聴く機会」ととらえた場合、「○%以上だからよい」という判断ができないのは言うまでもない。たとえ入力率が90%以上であっても、(欠席者も含めて)入力していない生徒へ必ずアプローチする必要がある。次年度も課題として取り組んでいかなければならない。
- ◎前述のように、年間10日以上の子次休暇を取得する教職員は、1月末時点で35人中21人(60%)となり、指標とした60%以上には達している。また、年次休暇以外の休暇を取得する教員も一定数おり、教職員は比較的休暇が取りやすい状況にあると思われる。次年度以降は、大阪市が策定した「働き方ビジョン」や「アクションプラン」を踏まえながら、教職員がやりがいをもって働ける環境づくり、仕事だけでなく私生活も充実できるような環境づくりに努めていく。
- ◎「ゆとりの日」は年間を通して週1日のペースで設定できた。「ゆとりの日」は、ほとんどの教員が17時～18時までには退勤することができている。働き方改革が叫ばれる今日、教職員が家族や自分のプライベートを大切にしながら業務にあたっている様子がうかがえる。実際、時間外勤務時間について総括すると、本校教職員のひと月あたりの時間外勤務時間の平均は、令和5年度は39時間だったのが、令和6年度から令和7年度にかけて33時間にまで減っている(大阪市公立中学校の平均は40時間程度)。教職員が仕事以外のプライベートも充実させ、心と身体にゆとりをもって業務にあたり、そのことが【学びを支える教育環境の充実】につながるということが実感できるようになると、ますます教職員の意識が変わっていくと思われる。